

Prof. A. Hillの

## 細胞生物学的日常

Episode

1



☾月☾日、研究所から車で30分ほどの日帰り温泉に行く。今働いている研究所は、名だたる温泉地にほど近く温泉好きにはこたえられない（だから選んだ訳ではない、と一応断っておく）。実際には忙しくてなかなか行けないのだが、土日の夜などに時間ができたらいそいそと車をとばす。最近のお気に入り、S善寺にある日帰り専用の湯だ（図1）。街を抜け、真っ暗な

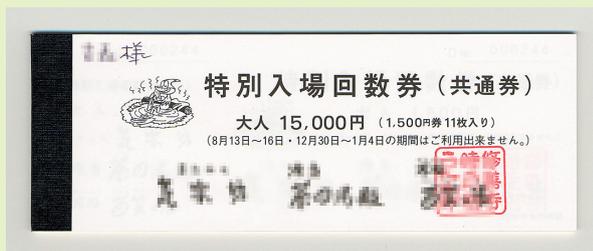
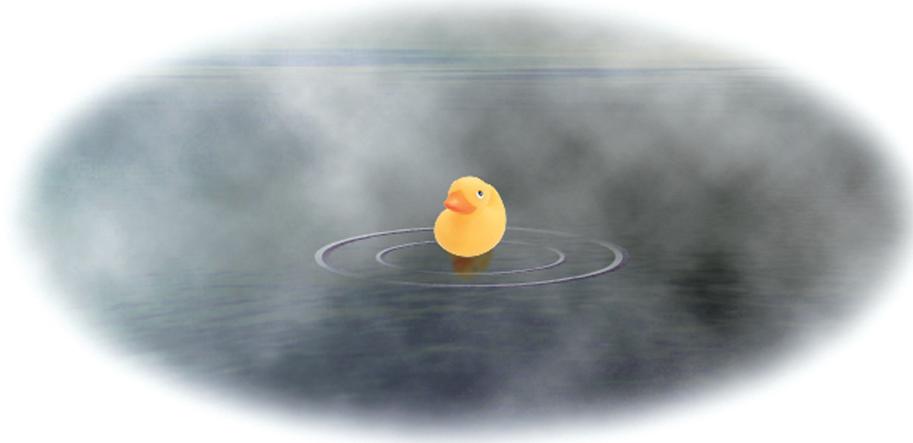


図1) 回数券を買えば一回お得。

川沿いを行くと忽然と煌々と灯りの点る巨大な建物が、まるで「千と千尋の神隠し」の油屋のように現れる。

浴場はかなり大きい。数年前にオープンしたばかりで、清潔なものいい。泡の噴き出す湯をはじめとした様々な内湯（死海風呂では身体が浮く！傷んだ部位に滲みる！茶風呂も有り）、幾つかの露天風呂、サウナ、砂風呂等々バラエティーに富んでいてかなり楽しめるが、やはり私が最も好きなのは、最初に浴場の扉を開けたときに、湯があふれる音や桶のカコーンという音が反響し、立ち込める湯気が全身にわっと押し寄せてくるあの瞬間である。いやあ生きていてよかった。先に湯船に身を沈めた知らないおじさんが、「あ」に点々と「う」に点々の中間くらいの声を漏らした。「おっさんくさあ。」と思いつつ自分も肩までつかたとたん、まるっきり同じ声が出た。トホホだが、これはもうお約束だからしょうがない。湯船が大きくて、端っこは霞んで見えない。鯨は無理かもしれないが、オットセイくらいは出てきてもおかしくない。不朽の名作、松岡享子作・林明子絵「おふろだいすき」の世界だ。風呂嫌いのあなた一度これ読みなさい。風呂が好きになる。絵本だが、筒井康隆にも洞窟の温泉を描いた幻想的な短編があった。確かに、立ち上る湯気と揺らめく湯面をぼんやり見ていると、現実から遊離し始める。我がラボのホームページのオープニングは、私がある日温泉で幻視したスピリチュアルな啓示を再現したものだ（単にのぼせていただけかも知れない）。露天風呂から空を見上げ、ゆったりと今後の研究について考えを巡らす……つもりで行っても大抵頭は見事に空っぽになってしまい無為に時が過ぎ、このあたり



が凡人の哀しさではある。

サービスや設備も大変充実していて、あかすり、マッサージ、休憩室、仮眠室（飛行機のビジネスクラスみたいにリクライニングシートにひとつずつテレビが付いている）、パンを焼いて売る店（温泉との関連は不明。でも結構美味しい）まである。食堂では旨いビールが飲める。ここは、県下では知らぬ者のないハム会社（図2）の系列で、そのハム屋が結構本格的なドイツ

### ソーセージおじさん紹介

名前：ソーセージおじさん  
 家族：単身独身  
 年齢：推定64歳  
 出身：職人さんの手  
 趣味：耕作  
 特技：天気予想  
 資格：ソーセージ検定特級  
 口癖：「ソーセージおじさんだよ」  
 居住区：富士山麓 おいしい村  
 近況：東の方に出張が増えました  
 備考：おかげで仲間も増え、村が活気づきました。



図2) そのハム会社のキャラクタ・ソーセージおじさん。S県民は全員このおじさんの歌を唄えるので、この歌に反応するかどうかでS県出身者を簡便に検出可能。EIAより簡単。

風地ビールも造っているのだ。車で来ているはずの人達がかんかん飲んでるが、私は人事院規則に従い飲まない。でも、炙った黒はんぺんを肴にノンアルコールビールを飲みつつ、ユーレ

イの出てる恋愛小説なんぞを読むのも悪くはない。

ただしこの温泉、おしゃれ、ではない。休憩室ではガキが走り回り、おばちゃんたちが持ち込み禁止の弁当を広げ、何故か私が行くときには必ず背中一面イラスト入りの（出入り禁止のはずの）オニーサンがいて、最近向こうもこちらを認識しているようで目が合うとニヤツとするし。サウナじゃ、地元の社長さん2人が小泉はイカン！とか2軒隣のオーバーサンは肺ガンだとか、大声で（何であんな大声なんだろう）ディスカッションしていて、お陰で新聞を取らない私も、最新の政治経済の情勢から〇×町（って知らないんだけど）の町内人間模様まで把握することができるようになった。お礼に、オートファジーの最新情報について概説してあげようと思ったのだが、「入れ墨の方と細胞生物学者はお断りします」と張り紙をされかねないのでぐっと我慢して、ひたすら汗を流すのである。

\*\*\*付記：当研究所までおいでいただければ、この温泉にご案内します。手みやげは特に必要ありません。上質のワインやケーキなどが好きですが、持ってこない人は、すぐ近所のツゲ義春の漫画に出てきそうな時間が停止したレトロ温泉に連れていく、ということは多分ありません。（でもその温泉も結構、はまります。「無能の人」になった気分。あ、元からなっているか。）